

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

〔調査研究活動〕台湾における地方議会選挙制度調査

著者	佐藤 俊一
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
巻	38
ページ	259-260
発行年	2003
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011369/

教育部で行っている活動内容と教育政策について説明を受けると共に、関連資料の提供を戴いた。

一九日は、昨日の行政院体育委員会運動施設處で説明をうけた運動施設の現場を見学し、その後博物館などを廻り、実際に資料となりうるモノの撮影をおこなった。二〇日は午後便で帰国した。

台湾における地方議会選挙制度調査

研究員 佐藤 俊 一

日時 二〇〇三年一月二二日～二八日

調査地 台湾 台北市、花蓮市、淡水鎮

一月二二日 出発 台北到着後プロジェクトリーダーの後藤先生と今回の調査について打合せ。

二三日、国立政治大学法律学系の江玉林・助理教授のご紹介により、同大学の選挙研究中心（選挙研究所）を訪れた。所長は出張中のため副研究員の孫清鑫氏より、台湾の中央（国政レベル）と地方（自治体レベル）の選挙制度に関する詳細な説明を受けた。それによると、地方レベルの直轄市、縣、縣轄市、鄉、鎮、市は、日本と同様の二元代表制になったという。しかし、選挙実態に関するヒアリングによると、特に地方選挙は不透明性が強いという。また、同研究所が実施してきた国政レベルの世論調査結果の資料提供とその説明を受けた。そして、調査の主目的が地方（自治体レ

ベル）の選挙制度と実態にあったので、その選挙データ等入手するため、内務部中央選挙委員会をご紹介いただいた。翌日、同選挙委員会の第一組組長である余明賢氏を訪問した。同氏より、改めて選挙制度の説明と資料提供を受けた。ただし、選挙結果のデータは、地方選挙の結果も含めてすべてHPに入力してあるので出版物は特例を除いて提供できないという。そこで、HPに入力してあるデータをみせてもらい、また、その検索等を現場で実際に試してみた。

二五日は、内政部民政司を訪れた。後藤先生の友人であり、現在、政府改造委員会の委員である台湾大学法律学院の蔡茂寅・教授も同席した。民政司司長の林美珠氏は別途用件があるので、挨拶後、退席した。そこで、科長の羅瑞卿氏に主として中央地方関係、地方（自治体）の事務と税財源、地方公務制などについてヒアリングした。逆に、羅氏は、日本のいわゆる「平成の大合併」に関心を抱き、質問されてきたので、その背景・要因や狙いなどを説明した。そして、地方自治制度に関する資料の提供を受けた。ところで、台湾の政府改造、とりわけ中央地方関係の改造（日本という地方分権改革）に、蔡教授が深くかかわっていることを知ったので、改めて同教授より改革過程と状況などについての説明を受けた。ただ、政府改造は、陳水扁政権によって着手されたものであるだけに、改革が具現化しているか否かは、二〇〇四年三月の総統選挙いかにかかっているという。

二六日は、首都台北市との比較対象として選択した地方都市の花蓮市（人口約一〇万）を視察した。また、二七日には、日本の町村に相当する郷鎮の状態を認識するため、台北市の郊外にあたる八里鄉淡水鎮の二～三の里を散策する形で視察した。そして、夕方にかけて、台北市の書店廻りを

行い、政府改造や地方自治制度に関する書籍、資料、報告書などを購入した。二八日、午後には台湾を立ち、帰国した。

台湾における日系製造業の文化変容について

期 間 二〇〇四年一月六日～一六日

客員研究員 米田公丸

各種の製造業の生産技術および技能の変化が起る過程で、個々の技能者、技術者、管理者がどの様にそれらの新しい技能、技術を体化していったかを知ることが今回の調査の目的である。

訪問企業・機関は ULVAC, INC. の台湾工場、台湾東電化股份有限公司、台湾住友商事股份有限公司（台北本社）、財訊雜誌社、台湾住友商事股份有限公司高雄分公司、台湾明志科技股份有限公司、南部科学工業園區管理局、奇美電子博物館等である。

優貝克科技股份有限公司（ULVAC Taiwan Inc.）の副総経理石塚博氏より詳細な説明を受けた。同社は社名の如く Ultimate in Vacuum で真空技術に関して先端を目指し、液晶ディスプレイ生産に必要な世界最大級のドライ式真空ポンプを二〇〇三年末に開発し注目を集めた。主な事業内容は、ディスプレイ・半導体・電子・電気・金属・機械・自動車・化学・食品・医薬品業界及び大学・研究所向け真空装置、周辺機器、真空コンポーネントの開発・製造・販売・カスタマーサポート及び諸機械の輸出入であり、

同時に真空技術全般に関する研究指導を行っている。日本本社の従業員は一、一七八人（二〇〇三年九月現在）である。経営方針としてロジスティクスやサプライ・チェーン・マネジメントを含む生産技術の革新、グローバルな水平分業やアライアンスなどを実行している。真空技術を基礎としてこれを補完するファインケミカル、ファインメカトロニクス、バイオテクノロジーを複合し、企業価値の向上を目指している。日本全体の真空機器の四半期毎の受注高、売上高の推移の説明を受けたが、受注高は二〇〇〇年第三四半期がピークで、以降二〇〇二年第一四半期まで下降し、第二四半期以降急増加し、二〇〇二年第四四半期、二〇〇三年第一四半期と下降し、二〇〇三年第二四半期以降増加に転じている。山から山へのサイクルは約二年である。これは新製品の開発に関係していると考えられる。受注高と販売高のラグは不規則である。台湾工場では従業員は一七〇人（うち女性五〇人）であり、高学歴で定着率が低い為、従業員に優先持ち株を与えているとのことであった。工場の二階の一部に従業員用の寮があった。従業員は概ね勤勉に働き、対人関係においても協調的であるとのことであった。

台湾住友商事股份有限公司（台北本社）の中西副総経理・業務部長より台湾人の企業化精神について非常に有益な講義を受けた。台湾住友商事股份有限公司高雄支店長の成重氏より滞在五年に及ぶ高雄での勤務経験をもとに貴重な台湾人気質を伺うことが出来た。日本のサラリーマンとは異なった生活態度と、人生目標について、かつて香港の企業調査で経験したこと、を思い出した。台湾の置かれている国際環境、対中国本土との関係など非常に厳しいものがあり、それらが日々の生活と人生の生き方に大きな影響